

# ベトナムにおける「シノロジー」の現在

——漢字の復権?——

牧野元紀

...

## 一 漢字文化圏の一員としてのベトナム

インドシナ半島東部に位置するベトナム国家は伝統的に、日本列島、朝鮮半島、中国大陆の諸国家と同様、いわゆる漢字文化圏に属しており、漢字と漢文がそれぞれ公式の文字、文章語として長い間、用いられた歴史がある。

紀元前一一年の漢王朝による南越国の滅亡以来、ベトナムはおよそ千年にわたって中国王朝による支配を受けた（北属期）。一〇世紀に五代十国の混乱に乗じて、国家としての独立を果たすものの、その後も中国との朝貢関係は保たれ、一九世紀後半に仏領インドシナの枠組みでフランスの植民地に組み込まれるまで、ベトナム国家において漢

字・漢文は正統な書記言語として確固たる地位を占めていた。文廟・国子監が建設され、科擧が開始されたのは一一世紀であり、科擧の合格を目的とする学校では通常、四書五經に加えて、北史（中国史）と史・賦・文策・経義が教えられた。

その後、科擧はフランスによる植民地経営が本格化するなかで一九一九年に廃止されるが、およそ千年の間、漢字は史書や法律、文学、儒・仏・道の經典などに広く用いられた。ベトナムの名だたる文筆家の多くは創作に漢字を用い、ベトナム史における事件や、ベトナム人の心理や感情、認識、思想を反映する、まさしく民族の特性を現すような文物が漢字で記された。たとえば一一世紀の李常傑（リ・トゥオン・キエット）の名高い漢詩、「南国山河南帝

居、……<sup>①</sup>」では北方に隣接する超大国の中国（宋朝）に対するベトナム国家の対抗意識、すなわち「南国意識」が表明されている。このようにベトナムにおける漢文とは中国文化を受容するためばかりに用いられたわけではなく、ベトナム人としての自意識を主張する媒体ともなったのである。

しかし、今日のベトナム語においては、クオックグー（Quốc ngữ）と呼ばれる表音文字が表記言語として使用されている。これは音声記号を伴ったラテン・アルファベツトで、一七世紀に、弾圧によって日本を追われたイエズス会の宣教師と司祭らが、ベトナムにおけるキリスト教布教を進展させるために考案したものとされる。

クオックグーはベトナム語固有の声調も併記できる利便性があり、漢字を読み書きできないベトナムの多くの民衆にとって話し言葉をそのまま転写できる利点もあることから、潜在的には漢字やベトナム民族文字のチュノムにくらべてはるかに習得が容易であったが、フランスの植民地化以前においてはキリスト教コミュニティも含めて、ベトナムの社会において一般に普及することはなかった。

仏領インドシナ連邦の成立後に状況が変化する。クオックグーは、フランス・インドシナ政府による政治権力からの指示と、文盲一掃を目指す改良派のベトナム知識人の運動が功を奏することにより、科擧の廃止と前後する一九二

〇年代頃までには社会に定着したとされる。これと相反する形で漢字・漢文はベトナム人一般を対象とする「国語」教育からはほぼ外されることとなり、ベトナム現代史において漢字・漢文教育が以後、隆盛をみることはなかった。

しかし、クオックグーで表記される現代ベトナム語の中にも、なお多くの漢字起源の語彙が含まれている。いわゆる漢越語である。たとえば大学を意味する *Dai hoc* は「*Dai hoc* 学」であり、公園を意味する *Cong vien* は「*Cong vien* 園」と音写することが可能である。ベトナムは「*Viet Nam* 南」であり、ホーチミンは「*Ho Chi Minh* 明」という具合に、地名や人名などの固有名詞もしばしば漢字表記に置き換えることが可能である。これら漢越音は、日本語でいえば「音読み」に近い位置を占めているといえる。

現代ベトナム語において、政治や経済の用語のうちおよそ七割の語彙は漢越語だといわれる。二〇世紀初頭から日本や中国で翻案された欧米由来の専門用語や概念語がベトナム語の中に多量に入ってきたことによるもので、クオックグー教育の普及とほぼ同時進行的に新たに導入されたものがそのほとんどを占めるが、なお今日においてもやはり欧米語を翻案した現代中国語からの新語が続々とベトナム語に導入されている。

このように漢字の「痕跡」を色濃く留めるベトナムを

「漢字文化圏」の一員とすることについて、本稿において特に支障はないと思われる。

## 二 ベトナム・シノロジのあゆみ

### (一) ベトナムにシノロジ？

「シノロジ」とは伝統的に中華文明圏、とりわけ中国に関する文学・史学・哲学の各部門の人文科学研究を指し、日本をはじめとする東アジアあるいは欧米の大学等研究機関においてもおおまかにこうした分類がなされている。

しかし現在、ベトナムの大学において、中国文学科や中国哲学科あるいは中国史学科は専科として存在が確認されない。たとえば中国史についていえば、ベトナム史と明確に分かたれておらず、中国史を独立した研究対象として扱うケースは稀である。これは、独自に中国史を研究するための資料的アクセスがベトナム国内においてきわめて限定されているということと、ベトナム国内外において中国史を専門とするベトナム人研究者と外国人研究者との間で学术交流が長らくなされてこなかったという事情がある。

また後述するようにベトナムにとっての中華文明とは自己のナショナル・アイデンティティを規定するデリケートな問題と絡むために、「シノロジ」についていえば、欧

米のそれとは異なる意味合いを念頭におく必要がある。先ほど掲げた「南国意識」の例にみられるようにベトナムにおいて「中華」の文物はベトナム人が受け手であると同時に、作り手でもあったからである。この点で同じ漢字文化圏に属する日本や韓国の事例は一見、参考になるかと思われる。

しかし、はやくにシナ学を確立させ、とくに戦後は研究対象を客体化させることで伝統ある独自の研究を積み重ねる日本は、現代における中国学研究（シノロジ）の深度において、ベトナムとは事情を著しく異にしている。また韓国も今日では自国とは切り離れた「外国」としての中国研究が進んでいるのでやはりベトナムとは状況を一にしない。ベトナムでは外来の中国的なものとベトナム固有のものが、歴史・文学・思想のすべての分野において、今日なお渾然として分かち難い状況にある。

それでもベトナムに「シノロジ」的研究を求め、個々の専門的な研究を探索するならば、国家人文社会科学センターに属する諸研究機関を尋ねるのが適当かと思われる。

漢文・チュノム研究院 (Viện Nghiên Cứu Hán Nôm、略称：ハンノム院)、哲学院 (Viện Triết Học)、史学院 (Viện Sử Học) には漢籍を用いた研究を行う研究者が少なからず存在する。とりわけハンノム院は漢文、チュノム文によつて書かれたベトナムと中国の古典籍の保存と分析研究



「家譜（ザーファー）」は東アジア社会に広く見られる家系記録の一種である「族譜」のベトナム版である。伝統村落における祖先祭祀に重要な役割をもった。

を活動の主体としており、「ベトナム・シノロジー」の中核を占めているといえる。

「ベトナム・シノロジー」は全般的には、史学よりも文学と哲学の研究が進んでおり、文学では近年、ハンノム院から中国の古典籍の翻訳が徐々に始めている。哲学研究ではマルクス思想を除いては、儒学研究が中心となっており、「四書五経」がすでに刊本で翻訳されている。

## (二) 前近代のベトナム・シノロジー？——儒学——

日本は前近代から続く自己の学問伝統の一部であった「漢学」を客体化することで、近代においてシノロジー（「シナ学」「中国学」）を成立させた。日本の研究者は「中

国」を客観的に「研究」することに努め、影響を受けていることは認めつつも、日本人のアイデンティティの問題とは切り離して、透明な主体であらうと試みた。特に戦後において中国研究は「外国研究」の一環として意識され、今日に至っている。さてベトナムにおける前近代の「漢学」事情はいかなるものであったのだろうか。

チャン・ディン・フオン (Tran Dinh Huon) は一九八〇年代におけるNIE S諸国の経済的台頭が見られた折に、ベトナム社会にみられる儒教伝統と社会主義との連続性について、最初に指摘を行った研究者である。中国経済の状況を背景に「漢字文化圏」が再び脚光を浴びる今日と状況はある程度類似しており、ベトナムにおける儒教・漢字文化を今日的な意味でとらえなおす作業は氏没後の今日、さまざまなベトナム人研究者に継承されている。

さて、歴史的にみると、日本をはじめ、中国や朝鮮などでは儒学において様々な学派が形成され、哲学的思惟や論争が行われ、考証学などが発達した経緯がある。しかし、チャンによれば、前近代のベトナムにおいて学術の創造的な探求が行われることは稀であったという。

これには諸々の理由が考えられるが、チャンは、まず一般的にベトナムでは国立私立を問わず、学校において書籍が不足していたという点を挙げ、次にベトナムの儒者には留学経験者が少なかった点を挙げている。

前近代のベトナム社会においてはそもそも学問とは科挙試験に受かるためだけになされるものとの共通認識が広くもたれていた。また、ベトナムの儒者は、思想家・学者というよりは文人であった。文人という根本的性情をもつベトナムの儒者の間で学派争いはみられなかったという。ベトナムの儒教は大体において宋儒（朱熹）であるが、歴史上、この朱子学思想を攻撃・反駁した者もおらず、あるいは議論において個々の見解の異同を明らかにした者もいなかったとされる。チャンによれば、かようなベトナム儒教の形式主義は二〇世紀初頭まで存続した。

儒教と漢文学においてベトナム史上はじめて変化がみられたのは二〇世紀初頭の愛国啓蒙運動においてであった。

ここではフィン・トゥック・カン (Huỳnh Thúc Kháng) の「良玉山賦」、あるいは「告陋腐文」（作者不詳）において、空虚な中身の長い長文をただ操るだけの守旧的な儒者への批判が行われ、科挙への反発が示された。開明的な儒学者による愛国主義の漢文が現れ、それらはいずれも簡潔で分かりやすい内容のものであった。

しかしながら、時を同じくして盛り上がったクオックグーの普及運動に押される形で、ベトナム漢文・儒学の改良に向けた動きは次第に幕を下ろし、人々の関心も薄れていくこととなった。

そもそもベトナム人にとつての儒教は日常意識の深層に

あまりに浸透しており、ベトナム人自身がそれを客観的な研究対象として特別に顧みることは近代においてもきわめて稀であった。植民地支配とそれに続く社会動乱の時代において安定した学問環境が保障されなかったことも一因として考えられよう。ベトナム人による「シノロジー」確立へ向けての動き、すなわち、「他者」としての位置づけがなされる「中国古典文化」の研究は一九四五年の独立以前においてその証跡を確認することは難しい。

### (三) ベトナムにおける古典研究・教育の復興

——ハンノムに対する国家の認知——

そもそも「ハンノム」とは、ベトナム語で漢字・漢文を意味する「ハン」(Han)と、漢字の偏旁を独自に組み合わせで作った民族文字の字喃(チュノム)を示す「ノム」(Nom)の合成語であり、一般に「ハンノム文」という場合、漢文あるいはチュノム文のどちらか、もしくは漢字・チュノムが混在する文を総称する。

一九四五年の八月革命後に独立を果たしたベトナム共産党と国家はベトナム全土に散るハンノム遺産の収集と保管、および研究活動に関心を持ち始める。グエン・ズイ・キー (Nguyễn Duy Quý) によれば、これらは「何世紀にも渡って陶冶されたベトナムの精神と骨格を体现するような文物」であった。この時期においてハンノム文は、長ら

くフランスの支配にあったベトナム国家、ベトナム人民主義者、共產主義者にとつて、西洋文化からの独立を象徴する国粹としての象徴的意味合いをもっていたのである。

とくにチュノム文は明らかに民族性を示すものとされたが、ここでは漢文もまた文語であるゆえに現代の中国とは切り離されたベトナム固有の文化遺産として把握された。<sup>⑤</sup>

ここにおいて本来的に不可分の関係にあったハンノム文とベトナム古典文化との断絶がようやく修復に向けて動き出したのである。

党と国家は新制度である社会主義制度の下で、ハンノム研究の幹部養成に関心を払い、まずハンノム上級教育課程（一九六五—一九六八）を設置し、これに続いて、ベトナム社会科学委員会のハンノム専修課程（一九七二—一九七五）が定め置かれた。さらに一九七二年以降はハノイ総合大学のハンノム専攻選択コース、師範学校、いくつかの研究所において漢字とチュノムの教育が行われることになった。<sup>⑥</sup>

現在においても、ハンノムは大学以上の高等教育機関において、希望者を対象に教授がなされている。このなかで専門性を見極めた後に選考を経た者がハンノム院をはじめとする国家の研究機関でさらなる専門教育を受けることになる。

しかし、ベトナムではすべての教育研究機関は国家管理

の下に置かれ、研究の目的は国家発展への奉仕という基本的な位置づけがなされており、『団結・安定・発展』の任務に努め、現代の革命段階における国家の発展とともにあり、ベトナム社会主義祖国防衛事業に参画している<sup>⑦</sup>との表明はベトナム人研究者において、ドイモイ以後の今日においても一応認めることができる。ベトナムにおけるハンノム教育は研究者の養成というよりも、むしろハンノム読解の専門家や資料の収集と保存における専門家など、「技術者」的な側面に人材養成の重点が置かれているのが特徴といえる。

#### （四）ハンノム院について

ハンノム院は一九七〇年に社会科学委員会において設立されたハンノム部が前身であり、政府によって正式にハンノム研究院設立の決定が下されたのは一九七九年である。

「ハンノム資料の収集、保管、研究を任務とし、高等教育を終えた後にハンノムの研究に従事する幹部を養成する最大の機関<sup>⑧</sup>」として以後、ハンノム院はベトナムにおける古典籍研究の中心的存在となった。

現在、同院は約二万点の書籍と、約四万点のハンノムによる拓本、約三千点の各種ハンノム資料（俗例・神勅・地簿など）を所蔵している。これらは仏領期にハノイに本拠を置いていた「フランス極東学院」（Ecole Française



ハンノム院正面玄関。「院研究漢喃」(Viện Nghiên Cứu Hán-Nôm)の額が掲げられている。(真柳誠氏 HP (<http://www.hum.ibaraki.ac.jp/chubun/mayanagi.html>) より転載)

d'Extreme-Orient) が二〇世紀初頭にベトナム各地で収集した物と、インドシナ戦争後の今日までの三〇年間に収集した物を含んでいる。<sup>①</sup>

また学術誌として『ハンノム雑誌』(Ta-Chi-Han Nom) を一九八六年より刊行しており、現在は通年で六回発行している。研究紀要としては『ハンノム学通報』(Thong Bao Han Nom Hoc) を一九九五年より年刊で発行していることが知られる。これらはハンノム院研究員のみならず、ベトナム内外の研究者に発表の場を提供している。

ハンノム院では高度なレベルを有する専門家の養成と、所蔵するハンノム本の解説に力が注がれており、例えばこれまでに中国

思想史、ベトナム儒教、ベトナム仏教に関する講義、漢文からクオックグーへの現代語訳、チュノム研究、書法研究、文学研究、文語・漢語・ハンノムの習得などの授業が行われ、ここで教育を受けた大学院生が学位取得に成功している。<sup>②</sup>

またハンノム資料の一部は今日、海外の研究者にも閲覧が許可されており、とりわけ漢籍を用いた研究に伝統的に強い日本人研究者にとつてきわめて利用価値の高い研究機関の一つとなっている。

### 三 シノロジーへの視線

#### ——漢字とナショナル・アイデンティティの現在——

#### (一) 漢字文化圏の枠組みからとらえた

#### 漢字に対する関心とシノロジー的研究の増加

近年ベトナムにおいては、漢字とその背景にある漢字文化を今日的な意味で見つめなおそうとする動きがある。一九九九年、レー・フイ・ティエウ (Le Huy Tieu) はその論文「世界の人々から次第に賞賛を受けている漢字と漢文化」<sup>③</sup>において、中国語が英語を超える使用人口数を誇っていることを強調し、ベトナム、日本、朝鮮を包摂する漢字文化圏の広がりに国際性を見出している。また、中国の

改革開放政策以降に「漢文化」への高まりが世界的に生じているとの認識を示し（韓国での中国語・中国文学・中国学への関心の高まりと学術組織の立ち上げ、中国におけるアジア各国や欧米からの留学生の増加、あるいは中国人研究者のアメリカにおける活躍など）、伸張する「漢文化」圏に属するベトナムの今後に「楽観的」な視座を提供している。

シノロジ的な研究領域においても同様に、漢字文化圏の枠組みの中で、ベトナム文化の位置付けを比較研究の手法で行う傾向がみられる。比較研究の隆盛は、同じく漢字文化圏に属する他の東アジア国家における学術研究への関心の高まりに触発された面もある。文学においては、チャン・ギア (Tran Nghia) による「比較文学からみたハンノム遺産」<sup>⑬</sup>、同「ベトナム漢文小説と『漢文化圏』の中国・朝鮮・日本の古典小説における相違点に関する研究」<sup>⑭</sup>、フオン・ルー (Phuong Luu) の「ベトナムと中国の文学を比較から得たもの」<sup>⑮</sup>の他、ベトナムと中国の艶情小説についての若干の比較考察的報告がみられる。史学については「ベトナム正史と中国正史との間の体裁についての比較研究」や、哲学・宗教については『同文』世界における、三教同源の研究」などのテーマを散見できる。言語学的研究としてはチュノムの成立過程を追った研究や「漢越語における日本語起源の中国語」などの研究は興味深く、日本

語や朝鮮語における漢字の使われ方に関心が向けられている。

## (二) 問題点

しかし量的増加に伴い、研究論文のなかには記述が表面的で印象論に留まっている場合も多く、残念ながら一次資料を駆使した本格的な分析はあまり多くはみられない。

また、シノロジ研究に特化しているわけではなく、主たる問題関心は依然として、ハンノム遺産を通して、自己の位置づけ、すなわち「ナショナル・アイデンティティ」の追求にある。そこではベトナムと中国（あるいはその他の漢字文化圏の国家）との比較、もしくはベトナムにおける中国文化の影響の度合いなどに主たる関心が置かれている。中国文学・中国史・中国哲学について、研究対象を自己（ベトナム）から分離し、客体化した「専論」を見出すことは難しい。

ファン・ヴァン・カック (Phan Van Cac) は東アジアにおけるシノロジの事情について考察し、ベトナムが日本や朝鮮と同様に中華文化との交流とその継承を幾千年も続けてきており、儒・仏・道についての研究と理解は早くからなされていると主張している。そのうえで、「西洋の学者のように中国をいかにとらえるか暗中模索にしているわけではない」として、「日本あるいは韓国におけるシノロジ



とベトナムのシノロジーを置き換え可能である」とするが、これはいささか性急な見方かと思われる。なぜならベトナム人としての学術的な中国研究、すなわち「シノロジー」の現況は先に述べたように、依然として独立した学問領域として認識はされておらず、明確な方向性が打ち出されているわけではないからである。

そもそも漢字文化圏に属するものの、現代のベトナムにおいて漢字が一般社会において広く使用されているわけではなく、こうした状況を鑑みる知識層の間ではむしろ漢字文化の断絶に危機感を抱く人々が出始めている。昨年（二〇〇四年）、ホーチミン市で開催された国際ベトナム学会議では、漢字教育を中等教育から始めた方が良いとの意見もベトナム人出席者の間から提案されたという。

また一方で、クオックグー重視の意見も根強い。漢字に対するベトナム・ナシヨナリズムからの反発は、かつてフランス統治時代にクオックグーの普及運動が盛んとなった時期に一部認められ、ベトナム語から一切の漢字を排斥すべきとの主張もなされた。また中越戦争（一九七九年）の前後において中国との関係が悪化した時期においても中国文化を表象する漢字に対する反発がみられた。

しかし、今日ではむしろベトナムの文化遺産としてハンノムの重要性は認めるものの、その実用性と連続性には特別な意義を認めずに、穏健な立場から漢字に距離を置こう

とするケースがより一般的である。たとえば、一切のハンノム古典はクオックグーで現代語訳することにより、はじめて「民族化」が達成されると、ファム・フイ・チャウは主張している。

ベトナムの知識層においては、今日、漢字文化圏の一員としての自己認識が高まり、漢字の有用性が確認されつつある反面、現代のベトナム人は漢字の直接的な使用者ではないという点で実際の齟齬が生じ始めている。表記言語として確固たる位置を占めるクオックグーであるが、漢字の需要が高まるにつれて、今後、教育の現場で両者の位置付けをめぐる議論が再び生じることも可能性として考えられよう。

#### 四 民衆におけるシノロジー

##### ——ドイモイ以後をみる——

日常生活を営むベトナム一般民衆における中国古典の受容は、民族アイデンティティの問題に傾きがちな国家机关における研究スタンスとは、関心の持たれ方において大いに異なっており、実用的あるいは娯楽的な側面が強いのが特徴である。

とりわけ一九九〇年代以降、経済における自由化（ドイモイ）の影響が表面化している。出版に対する国家による

補助金は廃止となり、出版物は市場原理に従って発行されるようになった。書籍の価格は年々上昇の一途をたどっているが、同時に読者層はかつてない広がりを見せており、書店には一般大衆向けの娯楽本が幅をきかせるようになった。

このような状況において、最近はいサイゴン解放以前に出版された研究書の再刊が次第に目に付くようになっていく。例えばサイゴン政権時代の南ベトナムで発行されたチャン・チヨン・キムの著作である『儒教』の再刊を挙げ

ることができる。あるいは『大南寔録』や『大越史記全書』などベトナムの史書やその他のハンノム本も現代語の翻訳付で出版されるようになった。

再版本を含め、ベトナムの出版市場において「漢字」が用いられ始めた理由はいくつか考えられる。まずはドイモイ後、徐々に対外交流が進み、外国人とくに日本人や中国人などの漢字文化圏に属する研究者や一般読者のベトナム古典籍に対する関心と需要が高まっていることを指摘することができる。また、ベトナム人においても、漢字を理解



パリ市13区中華街にある書店「南亜書局」。書籍はアメリカ経由で買入れを行い、店内には娯楽書・実用書が並ぶ。



パリ市5区学生街の一角にある SUDEST ASIE。SUDEST ASIE を営む越僑のトゥーさん (Mme. Tu)。この地で30年近く営業しており、ベトナムにおいて定期的な買入れを行っている。こちらは学術書がメイン。

する人が増えたことも想定できる。台湾や中国大陆との経済交流は拡大の一途をたどり、巷間には多くの民間の中国語学校が建設され、中国語学習者も益々増加する傾向にある。あるいはアメリカやフランスなどの海外に在住する越僑<sup>②</sup>や中国系ベトナム人も各地のコミュニティにおける書店やインターネットを経由してこのような「輸入書」を購入している。

しかし、ベトナムの一般民衆の漢字に対するこだわりについて、その主たる理由を歴史的に求めた場合、とりわけ考慮すべきは、彼らが漢字に対して伝統的な「権威性」と「聖性」を認めている点である。

民衆の日常生活において漢字が浸透し始めたのは儒教的規範が国家によって強制される一六世紀以降とされ、とりわけ、儒教による一元統治を志向した一九世紀のグエン朝による支配が大きい。漢字は朝廷から下される一切の法令、在地における郷約、土地契約文書、訴訟状、家譜、郷譜、村社簿などに用いられることで民衆の生活を規定する象徴となり、絶対的な権威を有するようになった。ベトナムの一般民衆にとって漢字に対する畏怖心が今日まで継続する所以である。

また、漢字は伝統的に聖性を帯びた文字でもある。ヨーロッパの教会にはどこにおいても大抵、ラテン語の碑文を見出すことができるが、ベトナムの寺廟にみられる対聯や

扁額に普遍的に用いられるのは漢字である。祖先祭祀などの宗教儀式や占いにおいても漢字は使用されている。今日でも、漢字は読めないものの、呪符などを代書屋に依頼して漢字で書いてもらうベトナム人は非常に多い。彼らはこのほうが神秘性があり靈驗あらたかであると信じているからである。

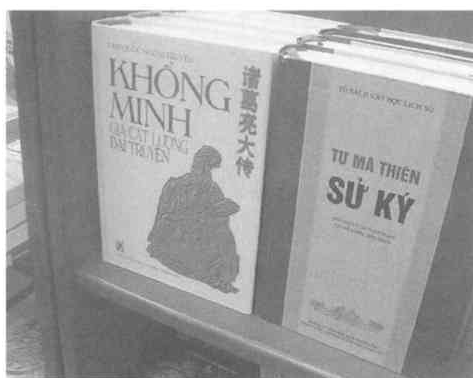
ドイモイの進展により、宗教活動をはじめとするベトナム人一般の日常生活は広がりをもせている。彼らが関心をもつ占いの仕方や儀式の方法（冠婚葬祭など）を記した『寿梅家礼』などの書物、あるいは漢方医学の書などは、本来、漢字で記されており、これらを読解するための漢字辞典や、漢字の知識を増やすための書物もますます必要とされている。ドイモイ以後の漢字による出版物の隆盛にはこのような背景もあると考えられる。

## おわりに

現代のベトナムにおいて高まりつつある中国古典文化への関心は、研究者を中心とする知識層による国家レベルの主導と、日常生活における民衆の娯楽あるいは実用における実際的な需要という、二つのアクターによって成り立っているが、「シノロジー」としてこれを客体化する学問風土がはたしてベトナムにおいて成立するのか、現在のところ

る容易に判断することはできない。

ただ今日、中国を中心とした東アジアの経済、政治のプレzensの増大が、ベトナム国家と民衆の自意識の変化に少なからず影響を与え続けているのは確かである。一九九五年のアセアン加入以降、東南アジアの主要な一員であると自己を規定し、それを志向したベトナムだが、今日、知識層、大衆層双方において、また内外に居住するベトナム人の日常の暮らしにおいて、漢字と中国古典文化が次第にその影響力を盛り返しつつある。



ハノイ市内の書店に並ぶ「漢方医学の書」(上)や司馬遷の『史記』、『諸葛亮大伝』(下)。(下：伊藤未帆氏提供)。

「漢字文化圏」におけるベトナムが自身において、外在しかつ内包する中国古典文化を、独立主体として客観的に扱い、それをいかに切り結ぶかは、今後ベトナムに「シノロギー」が成立し、「ベトナム・シノロギー」として独自の研究軸を打ち出すうえで重要である。それによりはじめて、他の東アジア諸国、あるいは欧米のシノロギーとの客観的かつ実証的な比較考察が行え、各国との研究交流もいつそう意義のあるものとなるだろう。

## 注

〔付記〕 本稿における大半のベトナム語資料の提供と現地における学界状況についての情報は、岩月純一氏（二橋大学大学院言語社会研究科助教授）のご厚意に依った。ここに記して謝意を表したい。

（一）ここに全文を記す。「南国山河南帝居 截然定分在天 如何逆虜来侵犯 汝等行看取敗虚」

〈2〉 本誌所収の諸論稿を参照。

〈3〉 第三章を参照。

〈4〉 Tran Dinh Huon 「ベトナムにおける儒教と儒学——現代の発展の実情を前にしての、その特徴と役割の問題——」『第二回漢字文化圏フォーラム——漢字文化圏の歴史と未来——講演資料』（漢字文化圏フォーラム実行委員会）、二六—二七頁。

〈5〉 Nguyen Duy Qui, “Phan dau xay dung Vien Han Nom xung dang la trung tam bao ron cac tu lieu nguyen ban ghi bang chu Han, chu Nom va nghien cuu khai thac di san Han Nom cua nuoc ta,” *Tap Chi Han Nom* (ハンノム雑誌、以下 *TCHN* と略) 43, 2000, p. 4.

〈6〉 「今日中国人が漢文と読んでいるものは文語であり、口語とは区別している。普通の教養レベルをもつ中国人は口語を解するにすぎない。文語を読みたいと願うならば特別に訓練を受け、学習せねばならない」とファム・フィ・チャウは述べる (Pham Huy Chau, “Nho lai mot thoai nhan ky niem 30 nam xay dung Vien Han Nom,” *TCHN* 43, 2000, p. 9)。

〈7〉 ファム・フィ・チャウによれば当時のハンノム専修課程は以下の三つに大別されるという。

第一は、中国古漢文、ベトナム古漢文、封建時代に盛衰した古代から近代までの代表的な作品の抜粋をチュノム・漢字で学ぶ部門で、外国語学科に付設されていた。そもその目的は「漢籍の文章を通して、古典漢文の文法を理解

し、それぞれの漢越発音に通曉し、チュノムを読解できるようになり、ベトナムのハンノム本の中に常々みられる典故について確実に、その若干の由来を把握すること」にあった。

第二は、哲学部門である。これは学生が基本的な思想の問題、とくにマルクス主義理論についての問題と党の文化路線を確実に把握するのに役立つものとされた。この運動を実現するために、古典のなかから必要な方法を導くことが求められたのである。このためにベトナム哲学の主な幹部（専門家）は適宜講義を請われたとされる。

第三は、文学、中国とベトナムの思想史、儒教史、仏教史、道教史などのハンノム古典を紐解くのに必要な各部門を総括するもので、その説明のためにやはり、大学から様々な教員が招請されたという (Pham Huy Chau, op. cit., p. 8)。

〈8〉 Nguyen Duy Qui, op. cit., p. 5.

〈9〉 一九八六年一二月、ベトナム共産党第六回党大会にて採用された「経済面を中心とするベトナムにおける改革开放政策である」。

〈10〉 Nguyen Duy Qui, op. cit., p. 4.

〈11〉 *ibid.*, p. 3.

〈12〉 Trinh Kiac Manh, “Vien Nghien cuu Han Nom 30 nam xay dung va phat trien,” *TCHN* 42, 2000, pp. 8-9.

〈13〉 Le Huy Tieu, “Chu Han va van hoa Han dang rat duoc nhieu nguoi tren the gioi quan tam,” *TCHN* 39, 1999, pp. 97-99.

〔14〕ベトナムには中国に起源をもつとみられる、類似した説話が数多くある。近年、台湾においてベトナムの文学

〔越南漢文小説叢刊〕が刊行)や史書の復刻がみられる。

漢字文化圏におけるベトナムの漢文文学に対する関心の高まりを反映しており、興味深い。また、日本人や韓国人のベトナム研究者の増加とベトナム研究の質的向上が、ドイモイ以後の学術誌や国際学会での交流を通してベトナム人研究者に直接刺激を与えているとも考えられる。

〔15〕Tran Nghia, "Di san Han Nom theo huong tiep can van hoc so sanh," *TCHN* 36, 1998, pp. 3-16.

〔16〕Tran Nghia, "Luoc do quan he tieu thuyet Han Nom Viet Nam va tieu thuyet co cac nuoc trong khu vuc," *TCHN* 35, 1998, pp. 3-14; Tran Nghia, "Cho khac nhau giua tieu thuyet Han Nom Viet Nam va tieu thuyet co cac nuoc trong khu vuc," *TCHN* 40, 1999, pp. 31-37.

〔17〕Phuong Lau, "Mot so the nghiem trong viec so sanh van hoa van hoc giua Viet Nam va Trung Hoa," *TCHN* 36, 1998, pp. 17-23.

〔81〕Tran Dinh Su, "Tu Han Viet goc Nhat trong tieng Viet," *TCHN* 39, 1999, pp. 3-8.

〔61〕Phan Van Cac, "Nhin lai Han hoc the ky XX," *TCHN* 49, 2001, p. 24.

〔20〕会議出席者の岩月純一氏からの御提供情報による。

〔21〕この時期、ベトナム在住の華僑が政治難民として大挙、海外へ流出したことは知られるが、残留した者も商店

などは政治迫害を恐れて、漢字の看板を取り下げるケースが多くみられた。

〔22〕「これらの内容を今日の人間に理解させたいのならば、その『民族化』を行わねばならない。ベトナム語にそれを転移させることに意義があり、いわゆるラテン文字のクオックグーに書き換えることである。文語についても、我が民族と国の将来は今日の文字に属するのである。漢字とチュノムはその歴史的使命を果たしたのである」(Pham Huy Chau, op. cit., p. 9.)。

〔23〕なお、表音文字であるクオックグーと表意文字である漢字について、日本語の場合のように、漢字と仮名の混合形態で同時に表記する試みはベトナム語においてはみられないことをここに改めて指摘しておく。

〔24〕海外在住のベトナム人「越僑」は南ベトナム出身者を中心に、百か国以上に及び、今日、約二七〇万人を数えている。